燎原

京都の民主運動史を語る会機関誌　題字　住谷悦治

会代表　天野和夫
同副代表　奥田修三

会費・誌代とも年3,000円
〔郵便振替払込〕
口座番号 01060=7=15762
加入者名　燎原社

久世神社　　山下正子

山宣の柩をかついで（二）　戎谷春松
戦後京都科学者運動の出発　岩井忠熊
『船乗り』（三）　田中豊蔵
湯浅貞夫氏追悼　奥田修三・田中章

山宣の柩をかついで
人民解放の道ひとすじに（二）

戎谷春松

（四）

告別式場は超満員で街頭に溢れていました。座長に大山郁夫、太田慶太郎が進行係として机に並んで座り、そのすぐ下に河上肇の横顔がみえます。その座長席を見えないように、征服巡査が顎紐をかけて立っています。衆議院議長の簡単な型通りの弔辞をのぞいて、各方面の弔辞は本富士警察署長によって全て中止を食って、そのたびごとに怒号と罵声がおこり、昂揚した戦斗的な雰囲気の中で葬儀は進行しましたが、警察はさすがに解散をくわせることはできませんでした。

山宣が生命を賭ってたたかった主義主著は反動勢力の卑劣な白テロによっても後退するものではありませんでしたが、これは大きな嵐の前ぶれでした。一九二九年四月一六日を中心に全国的に党と支持者に対する一千名におよぶ一斉検挙がおこなわれ、不屈の革命家市川正一らもつづいて検挙されました。三・一五と四・一六および中間検挙で、第三回党大会でえらばれた渡政、市正、国領らの党中央委員および主な活動家、経験ある指導者のほとんどが奪われました。それは日本の革命運動に経験を蓄積した指導をつづけることを妨げ指導の系統性が欠け、深い痛手をこうむりました。

しかし党は新しい活動家によって補充され侵略戦争反対、平和と民主主義、主権在民のスローガンをかかげて被圧迫人民の先頭に立ってたたかうことをやめませんでした。

むすび

①山宣は貧しい者、虐げられた人々に心からの愛情をもってその人々の利益のために先頭にたってたたかい、倦むことを知りませんでした。そこから人間愛と世界的視野で教養をひろめ科学的社会主義を自己の血肉としたのです。

②日本共産党のテーゼと方針を誠実に実践し、後退することはありませんでした。その活動を通じて自らの思想をきたえ、発展させ、人は何のために生きるかの目的を自覚し、大衆につよい影響をおよぼしたのです。

③山宣は帝国議会の活動は決して長いものではなかったが「国賊、赤魔、馬鹿野郎」と下劣な怒号にもひるむことなく、歴史をつくるのは人民大衆だと確信し、いのちがけで、勇気をもってたたかったのです。これこそ革命的人間像でなくてなんでありましょうか。

山宣没後六五年、三・一五、四・一六の大弾圧の六五年を記念するつどいにあたり、日本共産党は不滅であることを歴史はいきいきと国民に示しています。

日本共産党と日本の勤労人民は、山宣ひとりだけに赤旗を守らせなかったのです。山宣の柩は若い肩にも重かったが、その後の日本と世界の歴史はさらに複雑深刻で波乱多きものでありました。しかし歴史の弁証法は、敗北したのは科学的社会主義ではなく、日本人民と日本共産党でもなく、絶対主義的天皇制であり、歴史にそむいた体制とその追随者でありました。

われわれはこんにちほこりをもって党の七十年史を語ることができるのです。僕たちは、侵略戦争と治安維持法の犠牲者の体験を風化させないために、暗黒政治を再びゆるさないために、決意をかためたたかっています。

いまや革新の党は唯ひとつ日本共産党だけです。平和と社会進歩のため、日本共産党を先頭に幾百万大衆は、日米反動体制に徐々にかつ速度をはやめて重圧を加えています。

戦後、僕は何回か山宣の墓碑に同志らとともにまいり、長男である山本英治さんとも挨拶をかわし、山宣の業績についても話しあいました。再びその墓を石膏で塗りつぶされないためにも、平和と国民主権のために活動しましょうと――。

くしくもその父の命日、本年三月に亡くなられた長女の山本治子さんの歌があります。

○死してなお滅びぬひとの志
　雄々しかりしを今にしておもう

この短歌を御紹介して山宣の柩をかつぎその火をつぐものとして追悼をこめた挨拶をおわります。

以上

同志山本宣治デスマスク
鈴木賢二作　　上野正雄　　（戎谷記す）

参考書
「日本共産党の六十五年」
日本共産党中央委員会
「山本宣治全集第五巻」　汐文社
「私の歩んだ道」　太田慶太郎
「戦旗」一九二九年四月号
戦旗社
「日本共産党の六十年京都府版」
日本共産党中央委員会
「目でみる京都の民主運動史」
かもがわ出版
「山宣」西口克己小説集
新日本出版

戦後京都科学者運動の出発
―民科のころ―

岩井忠熊

一

戦前の進歩的科学者運動といえばプロレタリア科学研究所（プロ科）と唯物論研究会（唯研）があった。しかしいずれも一九三四～三八年には弾圧で活動不能あるいは解散を余儀なくされている。すくなからぬ進歩的知識人・文化人は反ファシズム統一戦線の一翼をになう自覚をもって行動したが、一九三七年一一月京都の『世界文化』関係者の検挙をほぼ最後として運動は終焉した。

敗戦後・京都では知識人・文化人がせきを切ったような活発な動きを開始した。当時の新聞を見ればさまざまな、今から見れば意外な人たちの活動も報じられている。その中でもっとも注目すべき事件は京都人文学園と民主主義科学者協会(民科)京都支部の創設であろう。筆者は間もなく京都民科の事務局員をつとめたので、その時代の見聞を中心に回顧してみたい。

東京での民科の創立は一九四六年一月、京都支部は同年三月であるから、支部としてもっとも早いことになる。ややおそいが筆者所持の四九年の名簿には支部顧問として末川博・湯川秀樹・湯浅八郎・山内年彦があげられ、会員三二五名だった。末川はのちに協会の会長となり、京都の初代事務局長は山内である。今から見ると名簿には意外な人物も見られるが、科学界における京都の比重を物語るように、堂々たる人物の参加が目だつ。運営は支部委員会を中心とし、事務局が執行の実務にあった。

二

東京の民科はむかしのプロ科と唯研の残党が中心だという意見をよく聞かされた。京都には旧プロ科―唯研の関係者はすくなく、大学関係者が中心だった。会で発言

の多かったのは『世界文化』関係の新村猛・和田洋一・久野収、戦時下の「隠れマルクス主義」ともいうべき奈良本辰也、堀江英一、小林惠之助・山宣の系譜につながる山内支部長の古い盟友の高橋松蔵（両人とも京大理学部の講師で、動物学教室に個室があった）らであった。高橋は戦前の無産者医療活動の先駆者としても有名である。大まかな傾向をいうと、反ファシズム文化運動との連続を重視しようとする主張と、むしろ戦後革新運動を支援する科学者のサロンでありたいという意見の二潮流があったように記憶する。いずれにせよ京都では啓蒙活動のための大衆的会員拡大と政治的引きまわしに対する批判が強かった。科学の啓蒙普及は講師派遣にとどめるべきだというのである。

事実、民科京都支部の主要な活動は公開講演会だった。四六年三月から六月にかけて民科主催の第一回公開講演会がおこなわれている。新村・湯川氏による同志社大学での講演会は三〇〇人余を集め、以後は場所を烏丸三条東入ルにあった大雅堂にうつした。わすれられないのは民科京都支部が編者となって日本科学社から刊行された学生叢書である。粗悪な仙花紙の文庫本だったが、人文・社会科学・自然科学にわたり、はじめの計画は一〇〇冊ほどの大シリーズだった。出版社の経営悪化等の事情でたしか一〇冊程度しか刊行できなかったが、名著といってよい良書を世に送り出している。

特筆すべき事は、戦後初の労働団体による労働講座が同年五月から民科の全面的支持を受けて総同盟京都府連の移動労働講座としてはじまったことである。これを皮きりにぞくぞくともたれた労働組合の学習講座のほとんどは、実質的に民科京都支部の重要な活動の中にくみ入れられていた。のちに京都市の労働課長をつとめた会員の石田良三郎や課員だった田畑しげしらが中心になって企画した夜間労働学校も、民科との密接な連絡のもとに成功をおおさめたといってよい。このような労働学校と民主的な科学者とのつながりは、京都人文学園等の潮流とともに現在の京都勤労者学園にまでおよんでいると評価できるだろう。

三

わたくし自身は一事務局員として会議の席に加わり、走り使いをしたにすぎない。"学徒出陣"してあやうく命を落とすところ間一髪で生還した私にとって、各分野の著名な学者が集まる民科での会議は、驚きと感嘆の連続する貴重な学習の場だった。思えばそれまでの私たちは上下の命令と服従の場で生きてきただけであり、大学でもえらい先生の意見をきいて心から納得しえない場合も腹におさめて、やたらに他人と議論してこなかったのである。民科は私にとってまさに民主主義の学校となった。

だが民科の空気も時代の急激な発展で変化した。各学問分野の若い戦後派研究者が、それぞれに分野別の部会をつくって活動しはじめたのである。特定テーマの研究会や社会的要請に応じたチューター活動が活発に展開された。全国的にも歴史部会機関誌『歴史評論』のような部会誌の定期刊行がつづく。この傾向が、民科をすでに大学・研究機関等に地位をもつ研究者・大家だけのせまいワクから解き放った。むしろ若い者の主要な活動の場となっていったといえる。

民科京都支部歴史部会の機関誌『新しい歴史学のために』第一号は一九五一年　六月の発行となっていた。初期の同誌の一種の偏向、安易な政治追随主義の指摘には同感できる。

しかしその面にだけ目を奪われて、戦前に天皇制国家の侍女の役割を果した歴史学の遺産を清算するためには、このようなまわり道をたどらざるをえなかったことへの一定の評価をもたなければ、一面的な見方といわざるをえないだろう。

民科は一九五七年に実質的に活動を停止した。しかし法律部会のようにその後も全国的に活発な活動を継続して今日にいたっている例がある。『新しい歴史学のために』はその後も民科京都支部歴史部会の機関誌として継続的に刊行されてきた。いま第二二〇号となっている。同誌の評価は学会で高く、いまは会員が全国に散在し、掲載論文がしばしば学会注目の的となってきた。

四

民科解散の事情やその後に民主的科学運動をになった一九六五年の日本科学者会議創立については、別に適切な筆者があるだろう。京都支部の一事務局員であり、また歴史部会の一メンバーであった、自分の経験を回顧するにとどめよう。

あの時代、進駐軍のCICはしばしば山内支部長を尋問していた。民科は「世界民科」と称する国際共産主義運動の末端組織ではないかという言いがかりである。

山内支部長は動物学者であり、「自分は政治は知らない、民主主義者であるだけだ」という主張一点張りで通し、ＣＩＣもサジをなげたときいていた。そのような民科にとって、一九四九年ごろからの占領軍の反動攻勢とレッドパージ、翌年の朝鮮戦争、五六年のスターリン批判が、大きな試練だったといえる。こうした情勢の進行の中で、民科を脱会する人が相ついだ。科学者を取りまく情勢にはたしかに大きな変化があり、それまでの民科の活動のあり方にもたしかに問題があった。だが、そのような時なればこそ、発会の精神の原点に立ち返って運動を継続すべきだったのではなかろうか。

あのころ大学の関係者で電話のある家に住んでいた人はすくなかった。事務局員の私は郵便を使うだけでなく、電車賃の節約をかねて急ぐ時はほとんど二本の足で歩いて連絡しなければならなかった。支部財政は火の車だったから。それにしても今から思えば、よく歩いたものである。また科学者という人たちはみな個性が強く、「変わった人」が多かった。こちらで通る話があちらでは受けいれられない。ただの使い走りといっても、結局、さまざまの意見や文句に出会うことになる。だれにでも理解され受け入れられる話し方とはどういうものかを、自然に会得することにもなった。

今でも歩くことが苦にならず、常識人を自称している（他人からはどう見えるか知らないが）根底には、民科事務局時代の経験があるように思えてならない。民科はいろんな意味で今の私にもいきている。（敬称略を省略させていただきました。）

『船乗り』（三）

田中豊蔵

（六）国際労働会議

大正九年の頃と思います。国際労働会議に、日本代表として桝本卯平が選ばれ、日本郵船ＫＫで渡米します。横浜港から出発です。港湾労組をはじめ日本の良心的な組合は、桝本卯平が政府に選ばれ資本家代表と妥協するにちがいないと、「桝本卯平を渡米さすな」「桝本をほうむれ」と盛んにののしって、六、七百人の労働者が船の前後をとりかこみました。

東京・神奈川のポリスが、この労働者を検束しました。桝本はポリスマンに守られ乗船し、資本家代表が見送りました。労働者はランチで船をとりかこみましたが、八千屯の巨船です。どうすることも出来ません。船はスピードを早めて港を出ました。

四、五日たった日本の新聞、朝日・毎日・読売・報知新聞などで知りましたが、太平洋で船員がストライキをやりました。海員組合長が無線電信で中止を命じました。組合長は楢崎猪太郎という人で、人物がどういうものかよくわかりました。

アメリカで会議を開くのか、オランダのアムステルダムで開くのかわかりませんが、日本の海事協同会、船主協会と日本海員組合長とは同じ穴のムジナでした。楢崎猪太郎会長の副会長は浜田国太郎で、次の会長になりました。三人目の会長も資本家の重役で門司荘太郎でした。

当時の海員組合の要求は、賃金の三割値上げ、遠洋航海に二割割増しをつけよ、船員を増やせ、有給休暇を実現せよ、会長の人選は選挙で行え、というものでした。

近海航路とは大連、天津、青島、上海、台湾のことをいうのです。これは大阪商船の独占航路でした。これ以外が遠洋航路ということです。

（七）川崎造船の大争議

私が直接参加した大正十年七月の川崎造船の争議は、長年の不平不満が積重なっていた労働者の怒りが自然発生的に爆発したものでした。

労働者の中には活動家が大勢おられ、青柿善一郎もその一人で友愛会兵庫支部の階級意識の高い木村錠吉君と相談して、労働者の要求を実現するよう奮闘されました。

木村君は常に、運動を支持する久留弘三君や東忠継君などの指導を信じて運動を進めてきたとの事です。京都の弁護士高山義三も当時は良心的で、木村君を支持して居たとのことでした。

事務所は神戸市元町二にありました。木村君は争議をやれば弾圧があると考え、賀川豊彦先生を表

に立てるべきと主張して、全国の友愛会を動員したのです。友愛会の会長鈴木文治も表に立ちました。

賀川豊彦先生は当時有名なクリスチャンで、川崎造船所労働者一万四千人の争議団長としたのは、資本家でもポリスマンでも軍隊でも、日本は申すに及ばずアメリカ、イギリス、世界中で名の知れ渡った人だったからです。無茶な手出しは出来ません。国粋会の暴力団でも、賀川先生の事務所の前を行ったり来たりしますが、一言も悪罵は言いません。先生は常に「汝の敵を愛せよ」と言われております。それで、先生の名前をかりたのでしょう。賀川先生は神戸の葺合区の新川という貧民街に住んでいて春子夫人は人々に暖く接していたのです。

川崎造船所の労働者は、当時一万四千人いたといわれていましたが、忙しい時は昼夜兼行です。不況の時は朝八時、夜五時で、残業もありますが手当は少ないものでした。

それで、川崎造船所の労働者は次の様な要求で立ちあがったのです。

一、組合の団結権を認めよ
一、賃金の値上げ
一、八時間労働の実施
一、失業手当実施
一、厚生年金支給
一、協同組合を認めよ
一、危険作業手当を出せ
一、雨天作業に衣服・防寒手当をというものでした。

争議の時はひどい不況でした。ダンロップ・神戸製鉄所・尼崎製鉄・西宮インノットの会社や工場がありましたが、新聞報道では七万二千名の労働者が争議に立ちあがっていました。

デモ隊には私服のポリスもおります。兵庫、大阪、岡山、広島の三万人程といわれるポリスが警戒しております。あちらの通り、こちらの通りに警戒網を張っていました。軍隊の出動もあったと聞きましたが、私は軍隊には出あいませんでした。

賀川豊彦先生と夫人が各争議団をまわられました。賀川先生と夫人は身なりも貧しく生活も質素です。常にキリストの話をされ、「貧しき者に幸福あれ」と祈りを捧げられます。兵庫県下の市民も争議団を支援し、救援カンパもあつまり、ブルジョア新聞も賀川先生の行動を尊敬していました。

食事も賀川先生は組合からはこばれるにぎりめしを食べておられます。ところが、総同盟の役員は、組合事務所で外の料理屋からとった食事をしているという話でした。

私は、木村錠吉氏のお宅に伺いました。

木村さんは、「君達は若いのだ、よく気をつけて見習いなさい」と激励をしてくれました。

木村錠吉氏は総同盟が分裂したとき評議会に入会し、三・一五事件の共産党弾圧で三年間やられました。青柿善一郎氏も評議会で、兵庫の市会議員になりました。久留弘三氏と東忠継氏は大学出の人々です。東氏はあとで山口県長府新聞の編集長になられました。兵庫の労組の会長、木村錠吉氏、川崎造船の青柿氏等は、本当に力いっぱい闘われたのです。藤岡文六君は県会議員になりました。川崎造船所の長留常務と鈴木文治とは取引があったとの人のうわさでした。この時、神戸ではダンロップタイヤー、尼崎製鉄所、その他大小の工場も今までにない争議に入りました。初めて参加した組合も多数あった様です。争議のための組合員もたくさんあつまったのではないかと思います。

兎に角、この川崎造船所の争議は、日本の労働争議の中でも最初にして最も大きな争議だといわれております。

川崎造船所の争議と時を同じくして、川崎汽船もストライキをやりました。日本郵船、大阪商船、三井汽船、川崎汽船は日本の代表的な汽船会社です。川崎汽船ＫＫは四千ｔ、五千ｔ、七、八千ｔの船があり、貨物船で、新しい船です。煙突は、上部の方に赤でＫと書いてあります。船名は、外国の国名や都市名がつけてありました。たとえば、ブラジル丸、サントス丸、チリ丸、ヴェノスアイレス丸、タスマニヤ丸、ミシシッピー丸、ニォルランス丸というような船名です。

大正十年七月、ミシシッピー川のニューオルリンズで川崎汽船ＫＫの貨物船とカルカッタ、ニーヨーク航路の船がストライキを宣言しました。船名はケープタウン丸との事です。アメリカ航路の船に、無線電信で組合が「ストライキに入れ」と指示しました。次から次に入港する川崎汽船と同じ姉妹船も、国際汽船も争議に参加しました。この数は五、六隻ともいわれました。いづれの組合も、賃金値上げ、団結権を認めよ、遠洋航路には手当を支給せよ、八時間労働制の実施、人員を増やせ、消費組合を造れ、失業手当をよこせ、厚生年金を実施せよなどの決議を次々とあげていきました。

日本政府の出先領事館は、日本の船長にきびしく申しつけをしま

した。労働者は、アメリカ労働組合に応援を求めました。I．W．Wは組合員を動員して、日本の川崎造船のストライキを応援してくれたといいます。

私が内地に帰って本社で話をすると、船長は「争議はもう中止だ」といいました。「ストライキに参加した者も、解雇は出さない事で話がまとまった」といいました。

兎に角、外国の港でもストライキをやったので、海員組合の会長もビックリしたということでした。私は海員組合のレポートで知りました。

こうして争議は終了しましたが、賀川豊彦氏はアメリカに渡り、永住されると新聞に出ました。やはり川崎造船の大争議も、この様な終末で終ったのです。私は一組合員でもう一つ組合の幹部ではありませんので、詳しいことはわかりませんでしたが、この大闘争は一般的には敗北だと言われています。

私も、海員休養所で遊んでいるわけにもいかず、木村錠吉氏におわかれに行きました。

「木村さん、労働者としてよい運動の勉強になりました。海員組合運動で労働運動の勉強をしましたので、京都に帰りましても組合運動をやります。今後共、正しい運動に導いて下さい。長い間お世話になりました」といいました。木村さんは、又手紙を下さいと申され、誠に惜しいわかれでした。

私をこの様に運動というものに引き入れてくれたのは一等セーラーマンでした。東川崎町の山岸海員休養所で、「おい田中、争議に参加して戦う労働者の姿や団結していくことを忘れるな。日本で初めての大争議川崎造船所の闘争を忘れるな。…木村は一番よい人間だ。久留弘三と東忠継は立派な指導者だ。川崎造船所の重役長留と友愛会の錦木文治は東大で同級だ。通じている」などといいました。私にしてみれば、この人はマボロシのセーラーマンでした。英語はうまいし外国船に乗っていました。あこがれのセーラーマンでした。

また、甲板部員のSはアメリカのアルミナールシップ会社の船に乗船し、ライジングサン・ナカグロ、オイルシップカンパニーにも乗っていました。この人も川崎造船所の大争議や島根県での大工場のゼネストに参加したことを誇りに思っていました。そして、総同盟の裏切りを残念だと申しておりました。アメリカへいかれた賀川先生は、有名な「太陽を射るもの」の本を出され日本でも沢山売られました。

（八）再び南洋航路に

私も長い間、休んでおりましたので、金につまり困りました。それで、日本で一番か二番目の大会社に就職し労働条件を知るのも勉強だと思いました。大阪商船に申込みをしました。二三日たって会社から出頭せよとの電報を受取り、直ぐにメリケン波止場の船会社に行きました。

会社の人事員は、中国大連―神戸港の航路に乗船させて呉れました。一航路二日間です。大会社入りをした私でしたが、労働者の待遇はよくありません。食事もよい方ではありません。近海航路はいやなもんです。私は遠洋航路を希望しました。

ところが、運命とは不思議なもので。私はあいにく目をいためて、医者に診てもらいますとトラホームだといいます。下船を命じられました。海員弘済会病院に通院しました。

東川崎町の山岸休養所から毎日通いました。二週間程で全快し会社にもどった私は、次の船を乗務員にたのみました。

会社は、しばらく休みなさい、船が入港すれば欠員があるだろう。しばらく待てということです。四、五日たって、明日入港する船に欠員があるから乗船しなさいといわれました。朝会社にいくとジャバ丸・四七五〇トンの船でした。私は大変嬉しかったです。

書過ぎ柳こうりをかついで、橋からサンパンで船にいき、甲板部長にお目にかかって「会社から来ましたよろしく」とお願いしました。

これで、とうとう私は三等水夫です。

神戸で南洋行きの木綿の箱を積込んで、名古屋で多治見の陶器をつみ、上海に向かいました。そして、門司港で石炭を積込み玄界灘の荒海をものともせず進みました。船員たちは

鳥も通わぬ玄界灘を
越えればゴビの砂漠に
月やどるらん

とうたいます。

上海港に入港、次はシンガポールです。先日の鹿児島県の指宿郡の彼女のことを思い出します。今度は日本人居留地会長に手紙を書いてみました。ジャバ国営の支店にも手紙はなし、あれだけたのんだのに何の手がかりもありません。

船は食糧品と水を積込んで、インドのボンベイの港に向かってい

ます。インド洋の航海は波静でした。船から流される物をイルカがたべるのです。私達のジャバ丸とイルカとが競争です。海にはまれば一口にのまれてしまいます。赤道直下、十二度、赤道祭をしてくれました。なつかしいゼンザイをこしらえてくれました。

セイロン島、コロンボの沖を通過、やしの実のなるセイロン島です。ボンベイ港に上陸すると、ここでもまた日本人売春婦がいました。いつ日本に帰れるやらわかりません。中国人のトバク場が沢山あります。日本人船員が、よい鴨です。中国人は商売人が多く、人力車が大はやり。インド人ははだしで走っています。ボンベイの繁華街からドックまではインドの金で一ルピーです。五日程で積荷を満積して日本に帰るのです。十四、五日で門司港につきます。一日半で神戸港、検疫をすまして倉庫の並ぶ突堤に船を横づけにします。無事で日本に帰れたものですから、私達はとてもうれしい気持です。船内の人々には親や兄弟姉妹、友人からの手紙が沢山来ているのです。ところが私には、親も他人も、例のカラユキさんの手紙もありません。ガッカリです。今になって便りがないのはどうしたことかと憤慨します。（以下次号）

湯浅貞夫氏追悼

長年にわたり『燎原』の編集者として活動してこられた湯浅貞夫氏は五月一六日、膵臓癌のため明治鍼灸大学付属病院で逝去されました。享年六八歳。御功績と御人柄をしのび、本誌に寄せられた会員各位の追悼文を掲載して御冥福を祈る次第です。

湯浅貞夫さんの逝去を悼む

ことし初め一月十七日付で、同じ頃病をえた私に返事の手紙をいただいた。「私の方は一月五日から検査の為入院し…一月三十日に手術をする予定となりました。それで又何日かの入院加療があろうと思いますので、うまくいけば三月からは活動出来るのではないかと思っています。沖縄闘争「京都市長選等…重要な時期に寝ているのは残念ですが、この際治療に努力いたしたいと思っています」。そのあと便箋三枚に『燎原』次号の編集についての意見や手だてが書かれていた。

誠実で活動的であり、頑健そのものとしか思えなかった湯浅さんが、この手紙からわずか四ヶ月で死去されたことは、何としても残念極まりない思いである。

一九八〇年住谷悦治・木村京太郎氏らの提唱で「京都の民主運動史を語る会」がつくられ、『燎原』を会誌として、この十五年間継続されてきた。湯浅さんは当初から会の実務の推進的役割を果してこられた。

船井郡に生れ、戦後初期の船井郡追分青年団長を皮切りに、日本共産党の府委員、地区委員長などとして、丹波地方のあらゆる民主運動を推進してこられた。最後の府議候補として活動された時、湯浅さんの長年に亘る運動歴年表をみせてもらったことがある。自分史をこえた戦後京都の社会運動史を示すものであることに感銘を受けた。

私は一九八八年、当時会代表の細野先生の要請をうけて『燎原』の編集、発行の仕事を、湯浅さん、品角さんらとすることになり、爾来八年間、交流を深めてきた。湯浅さんは資料集めの大変な能力をもち、一九九一年出版された『目で見る京都の民主運動史』など、そのことを証明している。戦前、戦後の活動家から聞書をして、多くの貴重な証言を誌上に掲載された。類まれな民主運動史への情熱にいつも敬服していた。

湯浅さんが自宅近くに資料保存室をつくっておられることを聞いていた。これからのお仕事を期待していたのに―。遺志を引きつぐ条件がつくられることを念願して、湯浅さんの冥福を祈りたいと思う。

（一九九六・六・二　奥田修三）

湯浅貞夫さんを偲ぶ

田中　章

四月二九日、病院にお見舞いしたときベッドに起き上がって、前前日に開通した丹波町までの国道九号線バイパスや湯浅さんの集められた郷土史の資料について熱心なお話をきかせて頂きました。その時、鼻から胃まで通した栄養を送る細い管を痛々しく感じましたが、五月一六日の訃報には、あんなに元気だったのにとびっくりしました。

湯浅さんには船井革新懇談会の設立、運営や丹波歴史探訪の会などでいろいろ教えていただきました。いつも湯浅さんの記憶力、実行力の素晴らしさの頭が下がりました。

会や本誌については、左記へご連絡ください。
〔事務局〕
〒六〇五　京都市東山区今熊野
南日吉町三九　奥村和郎
TEL
FAX
〇七五-五六一-七四八五